



Japan Society of  
Youth and Adolescent Psychology

# Newsletter

第 81 号 2020 年 7 月 5 日  
発行：日本青年心理学会事務局

## ■目次

<第 28 回大会委員長挨拶>	
浦上昌則：日本青年心理学会第 28 回大会へのおさそい	1
<特集：研究委員会企画>	
日本青年心理学会研究委員会：青年心理学研究の魅力を語る	2
石黒香苗：青年の多様な成長の芽を捉える	2
風間惇希：青年を対象とした研究の面白さについて	3
小高 恵：青年心理学研究の魅力	3
池田幸恭：青年心理学研究をとおして青年の可能性を育てる	4
下坂 剛：私にとっての青年たち	4
<書評：私のおすすめ、この一冊>	
赤木真弓：渡辺京二（著）平凡社ライブラリー（2005 年刊） 『逝きし世の面影』	5
山崎洋子：ナンシー・エトコフ（著）木村博江（訳）草思社（2000 年刊） 『なぜ美人ばかりが得をするのか』	6
<広報>	
広報・ニューズレター編集委員会からのお知らせ	6
事務局からのお知らせ	7

## <第 28 回大会委員長挨拶>

### 日本青年心理学会第 28 回大会へのおさそい

大会委員長 浦上 昌則（南山大学）

新型コロナウイルス感染症の流行により、会員の皆さまにおかれましては、日々の生活はもちろん、研究活動や教育活動に多大な影響を受けておられることと拝察いたします。このような状況下で、本年度の大会をどのように開催するか、学会理事長をはじめ、常任理事会の皆さまと意見交換をしながら検討を続けてまいりました。

その結果、6 月 19 日に学会ホームページ上で発表されましたように、日本青年心理学会第 28 回大会はオンラインでの開催が決定されました。はじめてのオンラインでの開催とはいえ、研究発表をじっくりと聞き、ともに考え、討論をするという本会の伝統を大切にしたい会にできるよう、大会準備委員会で検討を進めております。

予測不可能な点や、いまだ未定の部分も多く、1 号通信等の準備が遅れており、皆さまには大変ご迷惑をおかけいたしております。ここにお詫びを申し上げますとともに、以下の点をご了承いただき、ご準備を進めていただきますようお願いいたします。

- ・日程は 2020 年 12 月 5 日（土）～6 日（日）
- ・個人発表は 45 分～60 分程度を予定
- ・発表申込や原稿締切は、例年よりも遅い期日を予定（9・10 月ごろ）
- ・発表者を含むすべての参加者は、自宅等より zoom を用いて参加（zoom の契約は学会で行い、ミーティングの設定等は準備委員会が行なうことを考えておりますので、発表者を含むすべての参加者の皆さまは、定められた日時に、そこにアクセス

していただくことになります)

なお、発表など皆さまのご意向を把握させていただくための事前調査を行わせていただくかもしれません。その際には、ご協力をよろしくお願いいたします。

皆さまの研究活動にも多大な支障が生じていると拝察いたしますが、ふるってのご参加をよろしくお願いいたします。

### ＜特集＞ 青年心理学研究の魅力を語る

青年心理学者が研究を進める上で感じる面白さとはどのようなもののでしょうか。研究には、文献研究、研究計画の立案、データの収集、データの分析、論文執筆、論文投稿、学会発表、研究費の獲得、他の研究者との情報交換など様々な営みがあります。それぞれの営みをどのように感じるかは、青年心理学者が置かれている立場によっても様々だと思います。研究委員会では、学会員の皆さんが利用できるアーカイブデータの企画運営、セミナーやシンポジウムの開催といった取組みを通じて、研究機会の提供や学会員相互の情報交換の場を提供することを目的として活動を行っています。今回は第8回、第9回学会賞を受賞された先生方をはじめ、青年心理学研究に取り組んでおられる研究委員会のメンバーにご執筆をお願いいたしました。会員の皆様の今後の研究活動を考える一助となれば幸いです。また、現研究委員長に加え、前研究委員長にも執筆をお願いしました。今後の青年心理学会研究委員会の様々な取り組みへのご協力をお願いいたします。

(担当：日本青年心理学会研究委員会)

## 青年の多様な成長の芽を捉える

石黒 香苗 (花と森の東京病院)

私自身は、現在、臨床心理士・公認心理師としてクリニックや学生相談で青年期の学生やクライアントと多く関わっているため、今回は臨床現場の視点から青年心理学の面白さについて考えてみたいと思います。近年では青年の進路は多様化し、青年の典型的な成長の枠組みを描くことは難しいと言われていています。水田(2018)は、「悩まなく/悩めなくなってきた」青年が増えてきていること、そして、「青年の自我の統合性の弱まり」を指摘しています。背景には、社会の不確実性、保証された安全な生き方の指針のなさがあるとも言われています。その中で青年の成長は一義的には捉えにくく、その心の様相は社会の変化とともに早々と移り変わる可能性が高いものと考えられます。そのため、青年がどのように生きる道筋を模索し、どのように成長していくことができるのかという問いに対する答えは多様である可能性が高く、アップデートされることが望まれていると感じます。そして、青年心理学の面白さはそこにあるのではないのでしょうか。成長の可能性を大いに秘めている青年期こそ、アップデートされた青年心理学の知見から、時代に合った多様な成長の契機を見出せるのではないかと思うのです。

昨今の新型コロナウイルス感染症の拡大の影響で、青年の心にも多大な影響があり、特に経済的困窮や孤独感は多くの青年に心理的打撃を与えています。一方で、日々の臨床現場では、社会全体が停滞している状況下だからこそ「必要以上に人と会わなくてもいい、何かを達成しようと躍起になる必要はない」等、社会的プレッシャーからの解放を感じ、より自分らしく過ごせるようになったという青年も少なからずいるように感じています。社会の変化が求められている中で、青年の心の様相も様々に変化しているようです。青年心理学は、そこに、新たな青年の心の成長の芽を捉えることもできるかもしれない、と思っています。

### 引用文献

水田一郎(2018). 学生相談と青年期臨床——成長モデル再考——. 児童青年精神医学とその近接領域, 59(3), 294-301.

---

---

## 青年を対象とした研究の面白さについて

風間 惇希 (三重大学)

今回の執筆依頼を頂いた際、とても有難い機会を頂戴したなと思った一方で、「難しい」と感じた理由が2つありました。1つ目は、ついこの間まで青年期（あるいは成人形成期）の只中にいた（まだいるのかもしれませんが...）、研究者として未熟な私が何を書けばよいのかと迷ったため、そして2つ目が、これまであまり意識してこなかったことを言葉にしなければならなかったためです。大学院生時代から大学教員になった現在にかけて、とにかく目の前の臨床実践と研究に奔走してきた私にとって、ふと立ち止まって青年心理学研究の面白さについて考える機会がなかなか無かったこともあり、書く内容がすぐには出てきませんでした。そこで、まずは「面白さってなんだろう？」という素朴な疑問から今回の内容を考え始めました。

その過程で参照したものの1つが能智（2008）の説明です。能智（2008）は、「よい研究」だと判断する根拠として「よくわかる」と「面白い」ことを挙げ、後者の面白さの要素には、日常の様々な問題の解決・変容に役立つと感じられること、つまりその研究が実践の現場に役に立つこと（機能性）と、好奇心を引き起こしたり、それについて知ろうと動機づけさせること、つまり読み手の知識に新しい情報を付加すること（新奇性）の2つがあると説明しています。

その機能性と新奇性をもとに考えることで、私の青年心理学に感じる「面白さ」が少し見えてきました。まず、子どもから大人の中間に位置し、時に迷いながらも様々な可能性を秘めた青年という存在と、その青年を支援することに大きな魅力を感じている私（現在も大学生の支援に携わっています）にとっては、青年心理学研究の知見や営み一つひとつが実践と常に結びついています。また、自分の体験も含めた「青年」という存在に強い関心がある私にとって、まだまだ分からないことの多い青年を対象とした研究は、非常に新奇性の高いもののように思います。

加えて、「遊び」が面白い理由の1つは「失敗が許されること」と言われたりもしますが、失敗も含めた様々な試みを全て受け止めていただけるような、アットホームな雰囲気のある日本青年心理学会の存在も、私が研究を面白いと思いながら取り組める理由なのかもしれません（もちろん、研究が遊びということではございません）。

### 引用文献

能智正博（2008）. 「よい研究」とはどういうものか——研究の評価—— 下山晴彦・能智正博（編） 心理学の実践的研究法を学ぶ（pp.17-30） 新曜社

---

---

## 青年心理学研究の魅力

小高 恵 (太成学院大学)

私が青年期の親子関係の研究を始めるきっかけとなったのは、学部3回生のゼミの時間に、指導教授の辻岡美延先生から青年期の親子関係論文を紹介され、それを読んだことであつたと思います。当時、青年期の真ただ中にいた私は、「青年期の親子関係の論文であれば身近なテーマで、私にでも理解できるかもしれない」と思い、これまでの親子関係を振り返りながら論文を読みました。親子関係の認知構造に関する論文でしたが親子関係の構造が綺麗な形で捉えられ、数量的なデータで親子関係のやりとりを説明できるということにとっても驚いたことを覚えています。

それから30年、私はまだ青年期の親子関係研究を続けていますが、今でもデータを分析するときは、「どんな構造になっているのだろう」とワクワクして分析をしています。もちろんいつも綺麗な構造が得られるわけではないですし、仮説通りの結果を得ることができるわけではありませんが、様々な角度からデータを捉えることで親と子のやりとりを明らかにできることは青年心理学の研究の魅力の一つと思っています。

最近、ある個人に焦点を当て100日以上データを収集し時系列分析を行う研究に取

り組んでいます（実は 40 歳代半ばに再び大学院に入りなおし、そこで時系列研究の分析手法について学ぶことができました）。一組の親子関係に焦点を当て、その親子関係のやり取りを詳細に検討しています。一つ一つのデータ分析はとても時間のかかる作業ですが、それぞれの親子関係にはそれぞれの物語があり、青年期の親子関係の多様性に気づかされます。学部のゼミ発表で何となく読んだ親子関係の論文に魅了され、これまで細々と研究を続けてきました。これからは青年期の親子関係研究を続け、その面白さを授業の中で伝え、一人でも多くの学生さんに関心をもってもらえたらと思っています。

---

---

## 青年心理学研究をとおして青年の可能性を育てる

池田 幸恭（和洋女子大学）

2020 年は新型コロナウイルス（COVID-19）の流行によって、社会に大きな変化が生じ、多くの方が困難の中で生活する状況が続いています。貧困や学校教育における遠隔授業の課題など、青年をめぐる諸問題も前面に現れてきているように感じています。青年たちは、目の前のおとなの態度や社会の状況をどのように感じ、考えているのでしょうか。

青年心理学の特徴の一つとして、“青年心理学は青年にポジショニングして彼らの発達を上（大人）に向けて考える学問”であると指摘されています（溝上, 2010）。このことは、落合（2002）が論じる「青年を外から見ていく心理学」と「青年の側から見ていくもの」という青年心理学の 2 つの立場とも関係します。後者は、“青年が、自分自身に関する問いを持ち、自己理解を深め、自己洞察をするための青年心理学である”といえます。このように青年自身の視点から問題現象を理解する上で、研究者が生きてきた青年期が少なからず研究に反映されます。青年期に近い中で研究者が取り組む研究には、まさに青年の視点から問題が語り直されるという魅力があります。成人期にある研究者が行う研究には、当事者である青年と研究者が有するおとなの視点とのズレから、新しい発見が生じることも少なくありません。

生きた青年の豊かな可能性に触れ、ときには青年自身も気がついていない新たな可能性が育つことが、青年心理学研究の大きな魅力であると考えます。このように考えると、社会の見通しの難しさや混乱の中にあるからこそ、青年心理学研究をとおして青年たちの可能性の芽を育てることに大きな意義があるのではないのでしょうか。普段の生活や職場では、青年心理学研究について、じっくり議論する機会は少ないかもしれません。研究委員会の企画をはじめとする学会の会員同士の交流、研究者と青年の対話によって、青年心理学研究の魅力が育まれると感じています。

### 引用文献

- 溝上 慎一（2010）. 現代青年期の心理学——適応から自己形成の時代へ 有斐閣  
落合 良行（2002）. 青年のための心理学 落合 良行・伊藤 裕子・齊藤 誠一 ベーシック  
現代心理学 4 青年の心理学 改定版（pp.3-9）有斐閣

---

---

## 私にとっての青年たち

下坂 剛（四国大学）

私はこれまで 2 つの私立大学に勤めて 20 年以上たちます。年齢も 40 代半ばを過ぎて、自身も中学生を筆頭に 3 人の子どもがいます。大学で教鞭をとってよかったと思うことは、教育を通じて若者のエネルギーのおかげで元気をもらっていることです。今年は新型コロナウイルスの影響で、4 月当初から大学でもインターネットによる遠隔授業となり、学生とは直接会えず、キャンパスは非常に静かでした。毎日、インターネットの教材をアップしては、学生の課題提出状況をチェックするだけの日々が 2 か月近く続き、政府の緊急事態宣言が解除されてから、対面での授業が始まると大学に学生の賑やかな声が戻ってきました。「コロナうつ」という言葉がニュースで流れることがありますが、外出自粛生活から人と関

わる生活に戻ると「うつ状態」になる人がいるのではないかと懸念されているようです。私自身も対面授業が始まって1週間は毎日仕事から帰るととても疲れてました。しかし、3週目に入った現在、やはり学生とマスクをするなどして距離を取りつつも、様々に相談を聴いたり授業で交流することで、心に張りがあることを実感します。遠隔授業期間中の方が、身体面では明らかに楽だったのですが、学生が戻ってきていろいろと仕事が増えて体力的にはきつくなっても、彼らの生き生きとした表情や、授業での反応に接するだけで、やはり働き甲斐のような感覚が湧いてきます。

青年を研究するということは、年齢を重ねれば重ねるほど、かつて自分がそうだった若い頃のさまざまな思いを心理学的に考えていくことではないかと考えています。若い研究者の方は、自分と同世代の青年の心の問題を考えていく感覚でしょうか。同じ青年を研究対象としても、それぞれの研究者の発達段階に応じて、彼らがどのように映るかは違いが出てくるのではないかと思います。現在の私は中年期ですから、世代性が課題の時期です。青年と接するとき、彼らの成長とか将来を案じるような、そんな意識がよく湧きます。お節介かもしれませんが、青年の将来を案じるような視点で、そのうち青年心理学の研究をまたできたらいいなと思います。

---

### <書評:私のおすすめ, この一冊>

#### 逝きし世の面影

渡辺京二 (著) 平凡社ライブラリー (2005 年刊)

赤木 真弓 (立教大学)

本書は、幕末維新に日本に滞在した外国の知識人の感想記を素材にして、当時の日本の文明の姿を浮かび上がらせようとした1冊である。礼儀正しさや笑顔など、当時の国民性は現代に通じるものを感じるが、作者は「滅びた文明」と言い切る。「文化は滅びないし、ある民族の特性も滅びはしない。滅びるのは文明、歴史的個性としての生活総体のありようである」という。仮に羽根つきや凧揚げは残ったとしても、それは江戸の空に舞っていた羽や凧ではないというのである。個人に置き換えると、性格は変わらず、何らかの形で続いていくが、アイデンティティは滅びる可能性がある、ということであろう。

外国人たちの多くが、町人や農民について「みんな幸せそうで満足しているようにみえる」と記している。身分制度があり、武士の支配で虐げられてきた人々、という印象が長らくあったが、それは明治の知識人が己の過去を恥じ、全否定することで、新しい文明を作ろうとしたからだとして作者は解釈している。新しいアイデンティティを獲得しようとするときに、過去のアイデンティティを完全に否定することでそれを実現しようとする場合、古い文明は滅びるしかない。エリートから、過激な新興宗教に身を投じる青年が過去の価値観を完全否定するのと同じなのだろう。

さらに、本書の特徴として、定量的なデータや日本側の目を一切入れず、外国人の感想記のみを素材にしているという点があげられる。「日本人は貧しいが悲惨なものは一人もいない」というのは、生活は楽ではないが、みんな明るく満足そうに見えたということである。これは経済指標などでは測れないし、現代や当時の欧米と数量的に比較しても説明がつかないことである。つまり、余分な情報を入れず、外国人たちの感想のみを使っているのは、質的な検証としても興味深く、だからこそ「逝きし世の面影」が浮き彫りになっている。青年心理学者にとっても、様々な読み方ができる奥行きのある本だと思う。

## <書評:私のおすすめ, この一冊>

### なぜ美人ばかりが得をするのか

ナンシー・エトコフ (著) 木村博江 (訳) 草思社 (2000 年刊)

山崎 洋子 (お茶の水女子大学)

衝撃的なタイトルである。女性なら、今や男性も、一度は思ったことがあるのではないだろうか。「人間は外見じゃない、中身だ」と言われ続けてきたし、私自身も主張してきた。しかし、こころの奥底では腑に落ちないものがあつた。正直に言えば、「やっぱり、美人は得よね」と思うことが多いのだ。この本は、そんなもやもやとした気持ちに、脳科学や進化心理学などの研究を取り上げて、真正面から応えてくれる。

著者のナンシーエトコフはハーバード大学医学部の准教授で、マサチューセッツ病院で心理学者として勤務している。15 年以上、美と脳やウェルビーイングとの関係について研究を続けている。そんな彼女が、「概念の外の世界で、美は確実に支配をおこなっている」と言い切る。第 1 章では、美しさの定義について、歴史的な経緯を追い、古代から多くの人が美しさを追い求めてきたことが語られる。次の章では、乳児の知覚実験を挙げ、美への好みが生得的であることが示される。続く章では、美の力について日常の差別を取り上げ説明し、その後、美しさについて、生殖能力や健康という点から考察される。最後に、歴史的な経緯や科学的な根拠を押さえたうえで、彼女は「美を排斥するのではなく、あがめるのではない。美の持つ力を心にとどめよう。美は楽しむもの、美を楽しまなければ世界はくすんだ場所になるだけだ」と述べる。確かに美は途方もなく不公平である。それゆえ、我々は美を悪や善に結びつけたくなる。「美を楽しむ」という意見は、まさに目から鱗の発想である。著者の言うように資質のひとつとして美を楽しめれば、容姿以外の能力や魅力も楽しむことができるだろう。青年期は特に外見の評価が自己評価と結びつきやすい。だからこそ、私は、美しさについて科学的に分析している本書を、若者に、若者とかかわる人に読んでもらいたいと思う。本書は客観的に美しさについて考えてみる機会になるのではないかと思う。

---

## <広報>

### 広報・ニューズレター編集委員会からのお知らせ

第 72 号より、会員の皆様から意見や要望を募るとともに、自由な投稿・寄稿を促すことにしたとアナウンスさせていただきました。投稿・寄稿ルールについて、再度簡単に説明させていただきます。

- 会員から募集するのは、以下の 5 つです。
  - ① 特集テーマに取り上げて欲しいトピックス 「特集テーマ提案」  
随時募集。過去の NL 記事を振り返りつつ、編集委員会で検討し決定します。
  - ② 書評に取り上げて欲しい書籍 「書評推薦図書」  
随時募集。原則として最新号発行 1 ヶ月前に集約し掲載します。
  - ③ 書評執筆の希望 「書評執筆希望」  
掲載書籍への書評執筆の希望者を、原則として最新号発行後 1 ヶ月間募集します。該当書籍をお持ちでない場合には献本いたします。
  - ④ 次号の特集テーマに関する投稿の申し込み 「特集テーマ投稿希望」  
特集テーマへの投稿希望者は、原則として最新号発行後 1 ヶ月間募集します。
  - ⑤ 会員からの情報や意見の自由投稿 「投稿：会員から」  
随時募集。投稿内容が本学会の NL の記事に相応しいかを編集委員会で検討し、掲載の可否を決めます。不掲載の場合は、投稿者に理由を開示します。
- 投稿・寄稿時には、必ず件名を「」内の通りとし、本文の最初にお名前と所属・連絡先メールアドレスをお書きください。

- 書評および特集テーマへの執筆候補者は基本的に以下のように決定します。なるべく執筆希望者を優先しますが、編集委員会において会員の先生方の専門や経歴のほか、最近の寄稿状況を把握し検討したうえで執筆候補者を絞り込み、改めて執筆を依頼します。
- すべての投稿先は、[jsyap-nec@googlegroups.com](mailto:jsyap-nec@googlegroups.com)（日本青年心理学会 広報・ニュースレター編集委員会）です。
- 原稿の字数は 800 字程度を原則としますが、電子版なので柔軟に対応いたします。

---

---

## 事務局からのお知らせ

### I. 大会のお知らせ

6月に学会 [Web サイト](#)とメーリングリストでお知らせいたしましたとおり、今年度の大会は Zoom を用いたオンライン開催とすることが決定いたしました。詳細がこれから決定される部分も多いため、発表できるところから順に学会 Web サイトとメーリングリストでお知らせすることにいたしました。1号通信は詳細まで決定してからのお届けになりますのでご了承ください。例年とは異なる形式での開催となりますが、準備委員会でも工夫を凝らしてくださっています。多数のご発表・ご参加をお待ちしております。

[日本青年心理学会第28回大会](#)（オンライン）

会期：2020年12月5日（土）・6日（日）

### II. 電子投稿システムへの移行のお知らせ

現在、電子投稿システムへの移行のための準備が急ピッチで進められています。9月を目処に電子投稿システムへの移行ができるよう試運転をしながら最終チェックをしているところです。今しばらくお待ちください。

### III. 学会メーリングリストをご利用ください

現在、電子版ニュースレターや大会・研究会などの案内を、学会メーリングリストによって配信しています。会員であれば、青年心理学に関する研究会や講演会・シンポジウムなどの案内を、このメーリングリストを用いておこなうことができます。セキュリティの関係上、事務局からのみの発信となりますが、どうぞご利用ください。

日本青年心理学会事務局  
The Japan Society of Youth and Adolescent Psychology  
E-mail : [seinenshinri@gmail.com](mailto:seinenshinri@gmail.com)  
Website : <https://www.jsyap.org>  
振替口座：00940-6-273417  
口座名称：日本青年心理学会

お問合せはできるだけ E-mail でお願いいたします。